

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

博士論文審査報告書

論 文 題 目

原題名 Original Title	留学交流により結束する地域 ～日本人のアジア域内留学によるアジア・シティズンシップ およびグローバル・コンピテンシー育成に関する研究～
英訳 In Japanese	Unifying a Region through Study Abroad Exchange Research on Cultivating Japanese People's Asian Citizenship and Global Competency through Study Abroad in Asia

申 請 者

氏 名 Name	姓 Last Name	Middle Name	名 First Name
	眞谷		国光
学籍番号 Student ID	4014S016		

2022年 3月

1. 本論文の主旨

(1) 研究の背景と目的

アジア地域内における高等教育の国際的連携が急速に進展している。中でも、アジア域内留学交流の活発化が見られ、人々の交流が盛んに行われている。日本においては、アジア諸国の政府と共同で相互交流促進の施策を近年急速に展開しており、日中韓の地域的高等教育コンソーシアムであるキャンパス・アジアや東南アジアの地域的高等教育ネットワークへの参画である AIMS 等の事業の展開が行われている。一方で、そのように量的な拡大は着実に発展しているものの、日本では、こうした留学に参加した学生の変容の質的評価は、政策的にも学術的にも、十分になされているとは言い難い現状がある。元々、日本人は、アジアに対する帰属意識や連帯感の意識が低いと指摘されてきた。アジア・バロメーターの調査によれば、日本人はアジア人意識が他のアジア諸国と比較して顕著に低かった。また、日本人は、長らく内向き志向であると指摘され、グローバルに活躍するための素養を身に付けることが必要とされている。日本人のアジア留学経験は、このような課題を克服する要因となりえるのか。本研究の目的は、そのように、アジア域内留学がアジア・シティズンシップ(社会的アウトカム)およびグローバル・コンピテンシー(個人的アウトカム)を育成するのかを、実証的に分析し、そのインパクトを検証することである。

(2) 研究方法

本研究では、アジア・シティズンシップを、アジア社会に対峙する意識を持ち、その中で自己の責任や役割を考える姿勢を持つという概念として定義する。また、グローバル・コンピテンシーを、個人能力開発のための指標としてとらえ、中でも近年重要だと理解されている非認知能力に着目している。国際志向性、コミュニケーション意欲等のグローバルな環境で特に求められる能力に加え、心理学的指標(ビッグ・ファイブ、グリット、統制所在の内的帰属、自己概念等)を含む基幹的な能力の2側面から成る概念として定義する。本研究では、その2つの概念を用いて、対象者の異なる2種の質問紙調査「グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する調査」および「留学の効果測定調査」のデータセットを用いて分析を行った。前者は全国規模の調査であり、4,489人の留学経験者のデータ(留学後の計測)である。後者は、早稲田大学1校の調査であり、967人のデータ(留学前後2回の計測)である。いずれの調査もアジア留学経験者、アジア以外留学経験者、留学未経験者の3グループ間の比較分析を行った。

(3) 分析結果

第一に、アジア留学は、留学前後で、アジア・シティズンシップの値が有意に異なり、また留学未経験者と比較してその育成効果が確認された。その効果は2か月未満の短期留学においても確認され、留学期間の長さとはあまり関係がないことも確認された。また、ナショナル・リージョナル・グローバル各レベルのシティズンシップは、同時に高まることが分かった。さらに、アジア留学経験者と留学未経験者では、留学前の時点でアジア・シティズンシップの値が有意に異なり、国内における

準備教育的なアジア地域研究教育の重要性を導き出された。併せて、アジア「以外」への留学についても、アジア・シティズンシップを育成する効果があることが確認された。

第二に、アジア留学は、その前後で、グローバル・コンピテンシーの値が有意に異なり、また留学未経験者と比較してその育成効果が確認された。中でも、国際志向性やコミュニケーション意欲等は、留学経験により大きく育成されることが分かった。基本的に不変と言われる性格パーソナリティ特性のビッグ・ファイブの外向性・神経症傾向・開放性、そしてグリットの根気尺度、自己概念等も留学前後で有意な差が確認され、留学経験が大きなインパクトを持つことも明らかになった。また、比較的留学期間が長い方がそのインパクトが強いことが分かったが、同時に短期留学においても一部同様の効果が確認されることも分かった。そして、より早期の留学の方が、インパクトが概して強いことも分かった。さらに、アジア留学経験者と留学未経験者では、留学前の時点でグローバル・コンピテンシーの特に国際志向性に関する値が有意に異なり、上記同様、国内における準備教育的な異文化間教育の重要性を導き出すこともできた。

アジアの域内人的交流は、アジア地域への理解、貢献意識、帰属意識を高め、グローバルに活躍するための素養も育成されることが結論された。このことは、ひいてはアジア地域の安全保障や平和をもたらす、かつ地域・地球規模の課題に取り組む人材育成に繋がっていくことが期待される。

2. 本論文の構成と概要

序章では、研究目的と背景、問題意識、リサーチ・クエスチョン、仮説等が示されている。第1章では、域内留学交流の意義と近年の動向について、旧来の途上国から先進国への「垂直な」留学および地域内の「水平な」留学の2つの違いを説明している。第2章では、域内留学によるリージョナル・シティズンシップ育成に関する先行研究について論じられている。アジアではそのような研究はほとんどなく、域内留学の仕組みを早くから整えたヨーロッパの文献を参考にし、ヨーロッパ域内留学によるヨーロッパ・シティズンシップ育成の先行研究を概観した。第3章では、留学によるグローバル・コンピテンシー育成に関する先行研究について論じた。このテーマは欧米を中心に先行研究が多いが、特に非認知能力を含めた先行研究を概観し、本研究の趣旨に近い文献を整理した。第4章では、研究の方法を論じている。先行研究におけるアウトカムの定義と測定方法を改めて整理したうえで、本研究における主要概念の定義を行った。そして、その測定方法、実際の質問紙調査の概要、データ・サンプルの概略、分析の考え方等について論じた。第5章・第6章では、それぞれ、日本人学生のアジア留学によるアジア・シティズンシップ、そしてグローバル・コンピテンシー育成に関する調査の分析と考察について論じた。終章では、研究結果のサマリー、研究結果の学術的意義と先行研究への貢献、そして研究結果の社会的意義と今後の展望について論じる。

3. 口述試験での質疑応答

本論文審査委員会は、申請者から提出された学位請求論文を査読し、2021年8月10日に2時間余にわたり口述試験を実施した。主たる論点とその後の対応は以下の通りである。

(1) アジアにおける域内留学は急速に伸長しているものの、その効果に関する実証研究は、ヨーロッパなどの他地域に比して僅少であり、本研究の学術的意義は大きい。

(2) シティズンシップとコンピテンシーとの関係性の分析の視点が乏しい。どういう人がシティズンシップを持ちやすいのか。そこにコンピテンシーのことがどう関わるのか。そのような関係性についての言及が欲しい。

→アジア・シティズンシップとグローバル・コンピテンシーとの関係性の分析を加えた。アジア・シティズンシップとグローバル・コンピテンシーの「グローバルな資質に関する能力」部分は、互いに強い相関関係があったことが分かった。

(3) 水平の留学という枠組みを提示しているので、結論部分で1つの理論化を試みてはどうか。後半部分は若干平凡な議論が続き淡々と終わっている印象があるため、より大きな視点で理論化や提案を検討した方が良い。

→結論部分において、「水平な」地域内留学が、リージョナルなシティズンシップを育成し、かつナショナルやグローバルなレベルの意識と同時に多層的に育成されるという理論を提案した。また、その際にリージョンに必ずしも共同体は必要なく、「想像の」リージョンの意識が形成されるという言及も加えた。

(4) 域内での短期間の留学でアジア・シティズンシップが育成されたというのは若干飛躍がある。その過程を補足説明することが必要ではないか。

→ Asada(2017)や King and Ruiz-Gelices (2003)、Sigalas(2010)の研究を引用しつつ、例え一か国への留学であったとしても、その経験がリージョナル・シティズンシップへのゲイトウェイとなりえることを補足説明した。

(5) 最近の議論に、ASEAN などの一体化を表す際に用いられる Unity in Diversity という考え方がある。博士論文の内容に密接に関係するが、論文に言及がない。この考え方について、結論部分等で少し言及してはどうか。

→この Unity in Diversity の概念についても言及し、アジア・シティズンシップはその概念の考え方である相違性と類似性の両方を包括するものとして改めて整理した。

(6) 調査のサンプリングの仕方を、もう少し詳しく説明する必要があるのではないか。例えば、回収率等のサンプリングの概要について追記すべきである。

→調査のサンプリングの記述は確かにやや情報が不足していたため、できるだけ概要が分かる情報を加えた。回収率や介入群・対照群のそれぞれのサンプルの仕方の詳しい情報を追記し概要がより理解できるようにした。

口述試験では、以上のような指摘や質問に関して適切に回答が示され、修正すべき点については、最終提出までに適切に修正されたことを確認した。

4. 評価と審査結果

以上のように本研究は、アジア域内における高等教育の国際連携、特に留学生の移動が、アジア・シティズンシップとグローバル・コンピテンシーに与える効果を実証的に捉え研究である。アジア域内の高等教育連携・留学生交流は近年急速に拡大、政策的実践的な重要性は指摘されながらも、実証研究を基とした理論的な考察は十分ではなかった分野であり、本研究では、オリジナルな研究枠組みを設定したうえで、実証分析の結果を基に熟度の高い考察を行うことに成功しており、これは本研究の大きな学術的貢献と言える。また、アジア・シティズンシップとグローバル・コンピテンシーの、先行研究を基とした概念的把握にも成功しており、その意味でも学術的意義が大きいと言える。

以上のような口述試験の内容を踏まえ、論文に関して慎重かつ総合的に審査を行なった結果、博士学位請求論文としての水準を十分満たしているものと判断し、これを受理することに全委員が合意した。

5. 審査結果： 合格

申請者名： 眞谷国光

博士論文審査委員会

主査 Chief Examiner:

氏名 Name: 黒田一雄 (印)(Signature)

所属 Affiliation: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

職位 Title: 教授

学位 Degree: Ph.D. in Education 取得大学 Conferred by: コーネル大学

専門分野 Specialty: 比較国際教育学

副査(筆頭) Head Deputy Examiner:

氏名 Name: 中嶋聖雄 (印)(Signature)

所属 Affiliation: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

職位 Title: 教授

学位 Degree: Ph.D. in Sociology

取得大学 Conferred by: カリフォルニア大学バークレー校

専門分野 Specialty: 社会学

副査 Deputy Examiner:

氏名 Name: 北村友人 (印)(Signature)

所属 Affiliation: 東京大学大学院教育学研究科

職位 Title: 教授

学位 Degree: Ph.D. in Education

取得大学 Conferred by: カリフォルニア大学ロスアンゼルス校

専門分野 Specialty: 比較国際教育学

副査 Deputy Examiner:

氏名 Name: 平川幸子 (印)(Signature)

所属 Affiliation: 早稲田大学留学センター

職位 Title: 准教授

学位 Degree: 博士(学術)

取得大学 Conferred by: 早稲田大学

専門分野 Specialty: 国際関係論

2021年 8月 10日